地域みんなで子どもを守る。

「子ども安全パトロール活動」

～南小泉CSN（チャイルド・セーフティ・ネットワークス）～ 事例04

町内会からの協力 地域に根ざした防犯活動

信号機の設置から始まった、地域で子どもを見守るボランティア。

「都市計画道路を拡張した場所に信号がなかったんです。通学路にもなっていて、小学生が横断する時危険なので、関係機関に働きかけ信号機を設置してもらったんです」と南小泉CSNの原さん。

この働きかけを機に、平成16年に南小泉CSNを設立。地域の子どもたちの安全安心・健全育成を目指し、精力的に活動しています。

「関西の方で小学生を狙った事件が起きたことから、地域でも何とかしなくちゃいけない、ということになり、防犯ボランティアを集うことにしました。」そこで始まったのが子ども安全パトロール活動です。

ボランティア推薦や通学路点検への参加。町内会の協力で防犯活動。

ボランティアは60代を中心に30代から70代まで幅広い年齢層が集まりました。

「子どもと接する防犯活動ということもあり、どんな方にボランティアになっていただくかと慎重になります。その点、町内会からしっかりした方を推薦していただいており大変助かっているんです。」

このように地域に広がりを持ったネットワークとなっていますが、最初は地域と協力関係を築くのも大変だったとか。「町内会もいろいろと取り組みたいのですが、忙しくて手が回らないのが現状。そこで町内会長さんと相談して、南小泉CSNが音頭取りをさせていただいて、町内会に協力をお願いするという形で進めることにしました。」

南小泉CSNが主催して昼と夜の通学路の安全確認をする通学路点検を定期的に行っていますが、こちらも町内会や防犯・福祉部の方などに協力いただいています。「地域を決めて行っていますが、それでも私たちだけでは大変です。町内会からの協力は大変助かっています。」

地域の中で良い関係づくり 問題意識も共有して 活動をより広範に

防犯効果も高い、ついでの時にする「おついでパトロール活動」。

「新しい通学路は、人通りも少なく、不審者や犯罪者に付け込まれやすいと感じたんです。」

決まった時間やルートのパトロールだと、活動する方にも義務感が生じ、人員確保も難しく、なかなか続かないのが現状。そこで考えたのがなにかの『ついで』に行う「おついでパトロール」。その中で一番活発なのが犬の散歩のついでに行う「ワンワンパトロール隊」です。

「好きなときに負担なくできるのがこの仕組みの良いところです。」また、「不定期な方が予測不可能で犯罪者も嫌がると警察の方も話をされています」と、犯罪抑止力の面でも効果的なようです。

「ジャンパーや腕章を付けてパトロールしていると、お巡りさんや学校の方が挨拶してくれます。『警察の人？』なんて子どもたちに聞かれたりするんですよ」と楽しそうに話す原さん。

しっかり活動を告知していくことも必要と考え、広報紙も配布。経費を削減するためにPTAの広報紙の裏面を活用するなどの工夫もしています。

問題意識の共有が安心できる地域づくりにつながる。

現在南小泉CSNでは、防犯について考える機会を設けるために年１回防犯交流会を実施。「南小泉CSNの主催で行っていますが、町内会の方々にも参加いただいています。防犯に対する問題意識を広く共有すれば、さらに効果もあがり安心な地域づくりができるのではないでしょうか。」

地区の交番のお巡りさんから地区の犯罪状況の話をしてもらったり、警備会社の方の話を聞いた後、グループディスカッションを行ったりと、活発にコミュニケーションを図っています。「地域に子どもたちを守るという意識が広がり、そしてもっともっと根付いていくといいですね。」

こんな工夫もしています！

ちょっとした遊び心も大切な要素

まじめな取り組みだけに、ちょっとした遊び心も大切。ワンワンパトロール隊では、犬の名前の入ったシャツを犬に着せることにしています。パトロール中に地域の方に声を掛けられることも多く、ボランティア活動の充実感が得られ、活動を継続していくモチベーションにもなっています。

事例のまとめ

- 地域団体と町内会が協力し、「おついでパトロール」の仕組みを構築し、地域ぐるみで子どもの安全安心の確保に努めています。

地域一体となって次の時代を育む。

「栗っこネットワーク」

～栗生地区～ 事例05

学校と地域が一緒になって子どもたちを見守る

地域福祉の向上・子どもたちの健全育成・障害児理解の３つを目標に。

「栗生小学校設立の際に、すべての子どもたちの健全育成を支援したいと話し合ったんです」と語るのは栗っこネットワークの事務次長の大木さん。

そして、「誰でも安心して暮らせる地域づくり」を目指し、地域福祉の向上・子どもたちの健全育成・障害児理解を会の主旨とした「栗っこネットワーク」が誕生しました。

今でこそ学校と地域が連携している地域ぐるみの活動として注目されていますが、最初は学校の先生と大木さんと障害児学級の保護者の4～5名でスタート。「まず、行動していこう。枠にとらわれない交流の場を提供し、やれることから活動して多くの方に知ってもらうことから始めました。」

町内会との連携で地域一丸となった体制。

活動が地域に浸透していなかったせいか、活動開始から２年目くらいに、PTAとの違いが分からないといった声があがりました。そこで、学校長と事務長と各町内会長で話し合いが行われ、「これからは学校と地域がより一緒になって子どもたちを見守り育てていく必要がある」ということを改めて確認しました。

「それ以降、苦労していたスタッフ集めも、地域の協力のもと円滑に進むようになりました。特に町内会長さんは、忙しいのにも関わらずそれぞれ栗っこネットワークの会長や顧問を引き受けてくださっていて、栗っこネットワークの意義も認めていただいています。」

また、理事として各町内会から2～3名参加、その他、地域の方が20～30名参加するなど、組織体制も整ってきました。

栗っこネットワーク内で世代や立場を超えた交流活発な意見交換が成功の要因

地域に根ざした活動を目指す「４つの委員会」を立ち上げ。

「現在、広報を行う『おしらせ』、子どもの健全育成を目指す『ふれあい』、障害者の理解を目指す『たすけあい』、地域福祉の向上を目指す『かたらい』の４つの委員会で活動しています。親しみやすいテーマで地域に根ざした活動を行っています。」

この4つの委員会が1年を通じて無理なくいろいろな取り組みを展開しています。

「例えば、『ふれあい』委員会では、蕃山登山を行った後に芋煮を食べたり、サイカチ沼の不法投棄がひどいということで清掃活動を行って、その後に芋煮を楽しんだり。楽しいふれあいの活動を毎年1回行っています。」

こういった取り組みを、「おしらせ」委員会では、会報「栗っこ」により町内2,600世帯に配布しています。

幅広い世代が交流。自由な意見交換が明日への糧。

「栗っこネットワークは、40代・50代を中心に、上は70代の先輩世代まで幅広い年齢層の方たちが参加しています。この世代の広がりが組織の運営に良い影響を与えてくれていると思います。」

幅広い世代や、いろいろな立場の方がいて、異なった視点から様々な意見が出て、役員会でも勉強になるようです。

「年齢が上の方の話は説得力があります。現役で働いているお父さんたちのまとめる能力にも感心します。」

「いろいろと活動を広げている栗っこネットワークですが、組織が大きくなって、当初の目的を再確認することが必要になってきました。今後もいろいろな問題を会議の中で自由に気兼ねなく話し合える栗っこネットワークでありたいと願っています。」

「様々な世代や立場の方たちが栗っこネットワーク内で交流し、楽しく活動していることは、これからの地域活動にとっても大切な財産だと思います。」

こんな工夫もしています！

栗っこネットワークでの交流が町内会活動にも好影響

栗生地区では、以前から連合町内会を中心に町内会の交流はありましたが、栗っこネットワークを通じて、地域の様々な団体間の交流や団体の会員間での交流がさらに図られています。この交流により、他団体の活動を知る良い機会になっています。

事例のまとめ

- 町内会と学校とPTAが連携し、幅広い世代といろいろな立場の方が活発に交流しながら様々な活動を企画・実施しています。

畑のパワーで町を元気に。

「まちなか農園藤坂」

～花壇大手町町内会～ 事例06

様々な団体との連携により「まちなか農園」を整備・運営

NPO法人との連携で新しい農園づくりにチャレンジ。

「町内にある1,000坪の道路建設予定地が資材置き場となっていて、地域住民から、景観上・防犯上・交通安全上良くないという意見があがっていました。そんな時、農園として活用したらいいのでは、という話が出たんです」と語る花壇大手町町内会会長の今野さん。

町内会で話をした結果、地域の交流のため、ぜひやろうということに。「まちなか農園藤坂」という名称で地域の農園づくりが始まりました。

「ただ、町内会で畑づくりをやったことがあるわけではありません。どんな風に進めたらいいんだろうと悩んでいた時、先行して他の地区でまちなか農園を運営していたNPO法人にいろいろと農作業の仕方などを教えていただきました。そこで知ったノウハウやネットワークが『まちなか農園藤坂』の実現に大いに役に立ちましたね。」

連携の輪が広がり若い力で着々と進む農園づくり。

畑の整備作業等は町内会とNPOが連携して実施。

「いろいろと手探りでしたが、NPOとのつながりのある団体など、さらに連携の輪が広がり、順調に農園づくりは進みました。大学生を中心としたボランティアの協力が大きな力となりましたね。」

農園の土留めは、農業高校の学校林の間伐材を使って生徒に行ってもらい、通路作りや草刈りは大学生と地域のボランティアに手伝ってもらいました。

また、畑の水やりに雨水を利用していますが、その雨水を溜める桶は市民団体の協力により設置されました。

多彩に広がる畑のパワー地域活性化につなげる

農園を活用したイベントにより地域を活性化する。

「農園で採れた作物は地域にいろんなものをもたらしてくれます。収穫物を使って料理教室を開催したり、藍の花で藍染めをしたり、収穫祭を開催するなど、コミュニティの活性化に利用しています」と言う今野さん。

様々な趣向を凝らして収穫物を使ったイベントを開催。例えば農園整備の際に協力してくれた農業高校の生徒と地域の方で、バラの花びら染めと交流会を開催。大変好評で多くの人で賑わったそうです。

「畑の人を引きつける力はすごい。畑を耕す人、見る人、食べる人などいろいろな関わり方があっていいのではないでしょうか。」

地区では高齢化が進んでおり、商店もなくなってきていて、日常の買い物もとても不便な状況になっています。そこで、農園指導に来てくれている農家の方に、野菜などの直売所を月2回開いてもらう取り組みも始めています。農園を多彩に活用することで地域に元気が生まれています。

日常の取り組みを通して、人と人とのコミュニケーションが図られる。

「農園の管理は手間暇がかかって大変ですが、この日常の大変さがあるからこそ、人々の愛着も深まり、地域につながりが生まれるのかも知れません。」

農園の管理は、40人を4つの班に分けて10人で7日間を受け持つという形をとっています。都合の悪い日は休むことができ無理なく活動できる体制となっています。

畑はオープンなところが魅力。人々の間に自由な会話が生まれ、コミュニティが活性化します。一人でやっても面白い、みんなでやったらもっと面白いということで、農園を通していろいろなネットワークが広がっています。

こんな工夫もしています！

町を再生するグランドデザイン作成委員会を立ち上げ

花壇大手町地区の町内会が主体となって町の活性化を考える「グランドデザイン作成委員会」を発足させています。地域のお祭りなどの文化活動や安全対策を始めとする5つの分科会のもと、「住み良いまち」を目指し、地域課題解決に向けて活発に活動しています。

事例のまとめ

- 農園を活用した多彩な事業を企画・実施し地域交流を図るとともに、管理・運営においてNPOを中心とした地域外の様々な団体と連携しています。